

第228回 日文研フォーラム



世俗化から見た近代仏教 — 日本とベトナムとの比較 —

Modern Buddhism from the Viewpoint of Secularization:
A Comparison between Japan and Vietnam



ファム ティ トゥ ザン
PHAM Thi Thu Giang

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。このフォーラムの報告書の公刊によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター

所長 猪木武徳

● テーマ ●

世俗化から見た近代仏教 —日本とベトナムとの比較—

**Modern Buddhism from the Viewpoint of Secularization:
A Comparison between Japan and Vietnam**



● 発表者 ●

Pham Thi Thu Giang

フアム ティ トウ ザン

ハノイ国家大学・人文社会科学大学東洋学部日本学科 専任講師
国際日本文化研究センター 外国人研究員

Lecturer, Department of Japanese Studies, Faculty of Oriental Studies,
University of Social Sciences & Humanities, Vietnam National University, Hanoi
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

Pham Thi Thu Giang

フアム ティ トウ ザン

ハノイ国家大学・人文社会科学大学東洋学部日本学科 専任講師
国際日本文化研究センター 外国人研究員

Lecturer, Department of Japanese Studies, Faculty of Oriental Studies,
University of Social Sciences & Humanities, Vietnam National University, Hanoi
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

平成 19 年 3 月 博士 (文学) (奈良女子大学)

平成 19 年 4 月 ハノイ国家大学・人文社会科学大学東洋学部日本学科 専任講師

平成 21 年 7 月 国際日本文化研究センター 外国人研究員就任 (平成 22 年 2 月迄)

著書・論文等

◎ 論文

- (1) 「近世真宗の月感騒動に関する研究ノート」(『日本史の方法』創刊号、2005年3月)
- (2) 「近世浄土真宗における肉食妻帯論—その人間観と仏教観—」(奈良女子大学大学院『人間文化研究科年報』第20号、2005年4月)
- (3) 「日本仏教と浄土真宗の妻帯問題に関する覚書—その人間観と仏教観—」(『日本史の方法』第3号、2006年1月)
- (4) 「日本仏教における妻帯問題—古代・中世・近世の実態と歴史的变化—」(『寧楽史苑』第51号、2006年)

◎ 翻訳書

- (1) *Phuc ong tu truyen*、ハノイ・世界出版社、2005年 (福次論吉著『福翁自伝』)
- (2) *Man dam nhan sinh*、ハノイ出版社、2008年12月 (松下幸之助著『人生談義』)

◎ベトナムと日本―仏教に関わる交流―

ベトナムと日本との国交が樹立されてから三六年ですが、交流が盛んになりつつあります。学術の分野でも両国の専門家が意見交換する場として研究会や国際シンポジウムが開催されることが少なくありません。ご存知のように日本もベトナムも漢字文化圏にあり、中国から大きな影響を受けたため、文化の面では多くの共通点があります。ベトナム仏教は小乗仏教の宗派もありますが、大部分は日本と同じように大乘仏教です。しかし、両国の仏教界の交流はあまり行われていないのか、あるいは行われてもなぜ注目されないのか分かりませんが、とにかく言及されることが少ないです。

その中でよく知られているのは、七五二年東大寺大仏開眼供養の際に、唐楽、高麗楽とともに「林邑楽」も演奏されたことです。林邑 (Lâm Ấp) というのはベトナム南部・中部を中心に栄えていたチャンパ王国の前身であり、二世紀末から八世紀まで存在していた王国です。開眼導師は菩提僊那ぼだいせんなという南インド出身の僧侶でしたが、その弟子である仏哲はチャンパ王国の人だったようです。彼は長らく奈良に住み、チャンパの音楽を日本に伝えたため、今日の日本の雅楽のなかに「林邑楽」として残っていると言われております。

さらに非常に不思議な巡り合わせを感じさせるのは、来年二〇一〇年は平城遷都千三百年とハノイ建都千年を記念する年です。それに向けて、二〇〇九年十一月二三日に奈良の

ブット・タップ寺の千手観音像



春日野荘で「ベトナムの歴史遺産と奈良・タンロン皇城（ハノイ）一〇〇〇年の歴史を掘る」という講演会が行われました。そして型染め作家である鳥羽美花が二〇一〇年一〇月五日から一一月一〇日まで奈良の薬師寺で「奈良・ハノイ 悠久の都を紡ぐ・鳥羽美花型染展―奈良遷都一三〇〇年、ハノイ建都一〇〇〇年を記念して―」を行う予定だとお聞きしました。その時にバックニン（Bắc Ninh）省のブット・タップ寺（Chùa Bút Tháp）からベトナムの仏像の傑作とされている千手観音を運んでくることが企画されています。その仏像は木像であり、三五〇年ほど前に作られたものであるため、遠方の日本まで運ぶことが可能かどうか検討されておりますが、もし許可が出るなら薬師寺の僧侶がブット・タップ寺まで迎えに行き、ブット・タップ寺の僧侶と一緒に供養を行うとか。そうなれば今までにない仏教寺院間の関係が結ばれるのではないかと思ひ、この事業が実現できるように祈るばかりです。

仏教の面で両国の交流が少ない中、奇跡といっても過言ではない出来事があります。一九七七年九月に、弁護士であり、古美術の造詣に深い渡辺卓郎氏が、東京銀座の古美術店でベトナムの梵鐘を発見しました。氏によれば、それは阮朝明命帝の時（一八二〇～一八四一）につくられたものであり、元々バックニン省のグー・ホ寺（五戸寺、Chùa Ngũ Hộ）の梵鐘でしたが、旧日本軍に持ち帰られたようです。それで氏は他の平和運動家や学者の友人とともに梵鐘返還運動を起こし、各地を巡回させました。京都の清水寺や奈良の東大寺なども回りました。その時に得られた寄付金で鐘を買い戻し、ベトナムに送り、一九七八年六月一四日にハノイのクアン・スー寺（館使寺、Chùa Quán Sứ）で返還式典を行いました。その後、梵鐘のゆくえは転々とし、一時期はブット・タップ寺にも安置されたようですが、最終的にはバックニン省の文化関係の倉庫に置かれ、三〇年近くそこに籠っていました。渡辺卓郎弁護士に頼まれ、長い間探していましたが、二〇〇一年にハノイ在住のフリーライターである小松みゆきさんによって発見されました。それから八年後の二〇〇九年一〇月によく、まもなく完成するバックニン省博物館に展示される準備に入っています。「ベトナムの鐘よ 平和のために 鳴れ！」という渡辺卓郎弁護士の念願は、いったいいつ叶うのか、ひそかに見守ってゆきたいと思えます。

◎ベトナム仏教と日本仏教の大まかな違い

ベトナムと日本の文化は共通点が多いと前述いたしました。中国の影響を受けながらもそれぞれ独立した道を歩んできたため、当然相違点も生まれてくるのです。しかも驚くことに同じように見えても、実はまったく違う要素もあります。ここで実証されていない報告者個人の感想ですが、ベトナム仏教と日本仏教の大まかな違いについてお話ししたいと思います。まず、釈迦の存在です。ベトナムの場合、釈迦は絶対的存在であり、キリスト教のイエスとイスラム教のアラーと同様です。釈迦を信仰しなければ仏教ではない、釈迦がなければ仏教寺院にならないというのは常識ですが、日本の寺院を訪れると、古代寺院に釈迦像があっても本尊として飾られることが少ないです。例えば、奈良の東大寺の本尊は釈迦ではなく、金堂に置かれているのは盧舎那仏坐像です。

信仰対象から見てそれほど違いますが、修行方法として「禪」についてもそれぞれ違う解釈をしています。ベトナムの寺院の中で純粹な禪寺は少ないし、多くの寺院はベトナム独自の禪宗と浄土宗が混ざっており、座禅する禅僧のほうが少ないですが、なぜか「禪」という言葉が非常に好んで使われています。二年ほど前に、考古学者であり、ベトナムの中で数少ない人骨研究の専門家の人であるグエン・ラン・クオン (Nguyễn Lân Cường) 先生にお話を聞いたことがあります。彼は一九八三年に初めて、ハノイ市トゥオ

ン・ティン (Thường Tin) 郡のダウ寺 (Chùa Dầu) で二人の僧侶のミイラを発見してから長い年月をかけて研究してきたわけですので、少し聞いてみると、すぐく熱く語ってくださいました。ミイラをつくる当時の技術について興味深い話を聞かせていただきましたが、その中でもっとも得意そうに語ってくださったのは、その特別な納骨のしかたを表現する言葉を見つけたことでした。それは今まで誰も考えていない「禪葬」(Thiền táng) という言葉でした。その二人の僧侶について史料はあまり残っていないし、もし実際に禅僧であっても、座禅だからといって、必ずそのような形で遺骨を残すとは限りません。それは稀な事例に過ぎないのに、「禪葬」と名づけてしまっても良いのかと疑問をいだきながら、ベトナム語として聞こえのいい言葉だなあとしみじみ感じました。「Triển」という言葉はベトナム語で単なる修行方法ではなく、仏教そのものという意味で使われる場合が多いです。ベトナムと違って、日本は以前から独自の「禅」概念が展開され、禅の宗派まで形成されました。鈴木大拙の著書からの影響かはつきり分かりませんが、外国人、特に欧米人から見て日本仏教というのは禅の仏教であると思う人が多いです。もちろん日本人全員が禅に馴染むわけではないと思いますが、それが日本独自の文化の一つであるという事は否定できないし、世界のどこの国にもない「禅」を展開したというのはいうまでもないことです。その意味でベトナムの「禅」と日本の「禅」は違います。そのため、日本人から

厳密に見れば、ベトナムの禅は禅ではないと思われても無理はないでしょう。

次に寺院の風景ですが、まったく違うといっても良いと思います。ベトナムの寺院の伽藍は派手です。大体門から中の伽藍まで壁が黄色く塗られ、その上また複雑な彫刻などで飾られます。日本人の観光客がハノイ市、あるいはホーチミン市の仏教寺院を通っても簡単に気付くことができないうと推察しております。逆に日本の寺院は規模がそれぞれ違います、ベトナムの寺院より何倍も大きいのです。そのわりには地味ですので、逆にたとえベトナム人の観光客が日本に来て外見だけですがすぐに見つけることはできないのではないかと思います。寺院は派手でも、ベトナム人の僧侶の生活はかなり質素です。都会にある寺院の一部以外ほとんど自給自足です。特に田舎のお寺の僧尼は非常に貧しい生活を送っている場合もあります。それと違って、日本の僧侶の生活は中流階級よりやや贅沢であり、寺院が幼稚園や大学や福祉施設などを運営したりします。しかも観光寺という一種の寺院があります。私は「やっつけていけない」とある観光寺のお坊さんに言われたことがあります。日本に来たばかりの頃ですので、寺院というのは修行の場であって、信仰さえあれば寺院が存続するし、お金をかけて立派に作らなくてもよいだろうと単純に思ったため、寺院なのになぜ「やっつけていけない」のか、分かりませんでした。

ところで、私個人にとってベトナム仏教と日本仏教はどういうところが特に違うのかと

いうと、やはり僧侶の日常生活様式です。日本に来る前は、仏教僧というのは基本的に禁欲生活を送ると当然のように思っていました。しかし、日本に来て、僧侶が当然のように肉食・妻帯することに驚いた覚えがあります。どちらも「当然」ですが、どうしてそんなに違うのかという疑問をずっと抱きました。私だけでなく、他のベトナム人は一見、誰でもそのように思うでしょう。

このように、ベトナム仏教も日本仏教も同じ中国から漢訳の経典を受け入れ、大乘仏教を展開させましたが、仏教の様相が違います。その相違点、共通点を分析することによって相互理解が深められ、両国の仏教界の交流が盛んに行われればと願って、その一つの試みとして本日「世俗からみた近代仏教―日本とベトナムとの比較―」という題でお話をさせていただく次第です。

◎概念の定義

導入部分が長くなりましたが、早速本論に入らせていただきます。まず、題目に出てきた「世俗化」概念です。今回私がなぜ「世俗化」を題目として取り上げようとするかという、今まで宗教学あるいは宗教社会学の「世俗化」の定義をお伺いしましたが、私がイメージしていた「世俗化」とかなり違ったため、その意味をなかなか掴めませんでした。

そこで日本仏教とベトナム仏教を事例にし、「入俗」と「入世」を媒介として「世俗化」概念を考えたいと思います。

宗教学分野において世俗化というのは、「社会活動に対する宗教の影響力が減少する過程」であると定義しています。インド出身のランジャナ・ムコパディヤという研究者は、「世俗化とは、近代化、合理化あるいはそれに伴う近代的社会制度の複数化や機能分化によって、制度的宗教が社会に及ぼす影響力を次第に喪失し、宗教が公的領域から私的領域へと移行していく過程のことである」と述べています。しかし、よく考えてみれば、この宗教学の「世俗化」定義は社会の「世俗化」であって、宗教の「世俗化」ではないと思います。氏はこの「世俗化」概念に基づいて近代宗教の影響力の喪失を認めながら、仏教の社会参加活動、つまり社会に対する仏教の影響について議論を展開させようとはしますが、矛盾を感じさせます。

本報告では、「世俗化」を宗教界内部の「世俗化」、特に僧侶自身の俗化問題として取り扱おうと思います。最終的にその「世俗化」によって仏教界が世俗社会との結びつきをどのようにつくってきたのかを明らかにしたいのです。今まで日本仏教の肉食妻帯問題を考察してきましたが、それは日本仏教の独自の世俗化の仕方だと思っております。古代・中世の僧侶は政治・文化領域まで活動を広げており、大きな寺院は仏教経典を探求する場

所だけでなく、総合的・大学的であり、単なる宗教活動の場ではなく、総合的組織として存在していました。その仏教の状態を「世俗化」と呼びたいのです。江戸時代になって仏教が比較的「静かに」存在していたため、世俗的世界と聖なる世界との境界線が明確に引かれました。しかし、明治五年と六年に太政官布告が發布されることによつて、仏教全体の僧尼が「勝手に」肉食妻帯できるようになりました。それと同時に多くの僧侶が政治、社会活動に積極的に取り組んだため、この時期は僧侶が全面的に「世俗化」しました。そこで近代的「社会参加仏教」の議論がはじめて可能になるのではないかと思います。

本報告の「世俗化」概念には二重の意味があります。①僧侶の生活習慣が世俗の人々と同じようになつていく過程、つまり禁欲生活離脱過程と、②僧侶が活動の場を世俗世界に広げる過程、つまり世俗社会進入過程です。それに基づいてみれば、近代日本の仏教の世俗化の方法は①と②であつて、「寺」というのは「家」になつて、つまり実質の出家がなくなりません。その世俗化の方法を本報告では「出家入俗」と呼びたいと思います。日本と違つて、近現代ベトナムの僧侶の世俗化の方法は②です。僧侶は自分自身を世俗化させませんが、仏教的活動を積極的に世俗世界に広げようとしています。ベトナム仏教において元々出家は脱俗とされますが、近代になつて世俗社会に入つていく動きが発生してきました。そのベトナム仏教の世俗化の方法を「出家入世」という言葉で表現したいと思います。

「入俗」と「入世」は報告者が提案する言葉のため、意味が分かりにくいでしょうから、ここで少し説明させていただきます。「入俗」というのは出家者が仏教戒律に戒められた禁欲を行わず、世俗の人々と同じような生活をし、蓄髪・肉食・妻帯などをする다고と考えております。自分をふくめて当時の僧侶の生活形態について、清沢満之は「外俗内僧」と述べましたが、ここで強調したいのは、僧侶は肉食妻帯しても宗教活動を維持するため、「入俗」というのは還俗ではないというのが当時の仏教界の共通認識だったと思います。

次に「入世」ですが、ベトナム語の「nhập thế」からそのまま漢字表記にした言葉です。この言葉はベトナム人の僧であるティック・ニヤット・ハン (Thích Nhất Hạnh) の思想に密接に関わっています。彼は一九五〇年代から「入世仏道」(Đạo Phật nhập thế)、「世の中に入っていく仏教」(Phật giáo đi vào cuộc đời)、「応用仏教」(Phật giáo ứng dụng)、「世俗世界に身を投じる仏道」(Đạo Phật dân thân) という言葉を使って、自分の思想を展開させようとしてきました。そこで、「Đạo Phật nhập thế」(入世仏道) という言葉を一九六四年にアメリカのコロンビア大学で講義する時に「Engaged Buddhism」(エンゲイジド・ブツディズム) と英訳し、そこから世界中に広がったようです。日本では「Engaged Buddhism」は「社会をつくる仏教」、「社会参加仏教」、「人間仏教」などと訳されていますが、本報告ではティック・ニヤット・ハンの「入世」という言葉をそのまま使いたいと思います。な

ぜかという、ティック・ニヤット・ハンの「入世」という言葉に潜んでいる深い思想と歴史的意義は「社会参加仏教」などに表現されていないからです。後ほど詳しく説明させていただきますが、ティック・ニヤット・ハンの「入世」概念は、活動の場を世俗世界に広げるといふことであつて、その過程で僧は僧であり、決して俗ではない、つまり社会活動も宗教活動の一環として考えるのです。しかし、ランジヤナ氏が提案される「社会参加仏教」というのは、「仏教者が布教・教化などいわゆる宗教活動にとどまらず、様々な社会活動も行い、それを仏教教義の実践化と見なし、その活動の影響が仏教界に限らず、一般社会にも及ぶという仏教の対社会的姿勢を示す用語である」（ランジヤナ・ムコパディヤーヤ『日本の社会参加仏教―法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』。氏は宗教社会学の観点から見て、修行者の活動の中で宗教活動と社会活動を区別しているようですが、そうすれば僧侶としての主体性、僧侶と一般社会活動家の違いが見えなくなるのではないかと思ひます。

1 明治期における日本仏教の改革と世俗化

近代日本仏教の肉食妻帯問題についていえば、始めに仏教改革運動が浮かんできます。前述のように明治五年四月二五日の太政官布告第一三三号と明治六年一月二二日の太政官

布告第二六号が出されることによつて、日本仏教全体の僧尼が「勝手」に肉食・結婚・蓄髪・還俗し、一般の人々と同じような服も着用することができるようになりました。それはいうまでもなく、仏教界にとつて非常に強い衝撃でした。当時、「八宗の泰斗」とされる行誠が、政府に提出した建白にその心境を語りました。行誠の建白は明治一年、すなわち太政官布告第一三三号が發布されてから六年後に出されましたが、それでも「驚駭に堪えず」という気持ちを隠せませんでした。驚くだけではなく、どうしても布告を理解できず、しかも従うべきかどうか結論がなかなか出せないという。さらに弟子達を前に政府の趣旨について、還俗したいと思う者は勝手に還俗せよという意味だと理解しなければなりません。決して僧侶のままでも肉食妻帯してもよいということではないと行誠は解釈し、弟子に説法しました。

行誠と同じように、太政官布告第一三三号が出された翌年、真言宗の釈雲照も建白を出しました。釈雲照によれば、政府の方針というのは僧侶が仏教の戒律を守りながら、政府の明治維新を支持することである。しかし、仏教界がそれを理解していないと批判しました。その状況の中で太政官布告第一三三号が出されたため、僧侶が誤解して、宗規を犯し、濫行している。釈雲照は、明治五年の太政官布告第一三三号が出されても、政府の方針は明治三年の「同宗規僧律ヲ守リ維新ノ御主意ヲ奉体セシム」法令と変わらないのであると

無理やり解釈しようとはしました。

その状況の中で明治一年に内務省布達が出され、戒律を維持するかどうかは僧侶次第であつて、政府はそれに干渉しないという方針を明確に示しました。その六年後、明治七年八月一日に太政官達第一九号を發布し、それまで政府の官職として宗教界を管轄した教導職を廃止し、各教団が自分の教団の宗規にそつて自由に宗教活動させるようになりました。その宗規を制定する過程において各教団は様々な問題にぶつかりますが、その中で肉食妻帯問題についての決断を求められました。そして、宗規が作られてからも連続的に改正されたため、その都度、肉食妻帯問題が取り上げられ、盛んに論争されました。

さらに明治二二年、兵役と被選挙権の問題が僧侶の目前に登場してきました。僧侶が軍事や権力に関わることは近代だけの問題ではありませんが、それまで正式に法律で定められていませんでした。そのような世俗社会の問題にぶつかることで、僧侶は自分と世俗の人々との違い、仏教と世俗社会との関係、仏教の存続の意義を再確認しなければならぬ立場に置かれました。そこから僧侶がどうあるべきなのか、仏教をどのように改革すれば新時代に存続し、世俗の人々からの支持を受けられるのかという問題が自然に出てきました。その時代の流れで肉食妻帯問題も取り上げられ、議論されました。僧侶は世俗の人々と同じように徴兵される一方、被選挙権を得る資格がないと政府が法律上で規定しました。

それで僧侶達が徴兵免除と被選挙権獲得の請願を政府に出しました。僧侶は仏教的本分を犯さない限り、一人の国民としての義務も果たし、世俗社会で活動すべきという理由からです。僧侶と世俗の社会との関係が議論になる状況の中で肉食妻帯論も転換期を迎えました。

明治一七年から各教団が宗規を何度も改正しました。明治二三年の「浄土宗西山派宗制改正案の綱領」にも「派内の僧侶一般肉食妻帯を厳禁する歟、或は公然肉食妻帯宗を改正する歟」という問題が取り上げられて、実際には宗制を改正する度に肉食妻帯問題をどのように取り扱えばよいのかという問題が懸案でした。それで僧侶の肉食妻帯をめぐって議論があらためて盛んになりました。当時、妻帯を禁止されても、寺院に女性を泊めたりしていました。そのため、宗制で禁止してもそのような悪い習慣をなかなか除けず、僧侶達は相変わらず女犯したりします。ここで注目すべきは「陽守陰犯」という言葉ですが、僧侶の肉食妻帯について当時の雑誌や新聞などによく使われていました。つまり、僧侶は表面で持戒しても、裏側で女犯したりします。実際、宗制で規定するだけでは簡単に問題を解決できないという意見がありました。その矛盾をどのように解決するか、新しい時代にとどのような仏教を目指すべきかという問題について、当時多くの見解が出されました。ここで仏教の戒律や習慣などに対する疑問が浮かび上がりました。新時代になって、僧侶は

戒律を守り、山奥に籠って仏教に専念すべきなのかという疑問から、戒律は世俗の社会の法律と同じものであり、その世俗の法律を社会の変化とともに改変しなければならぬように、仏教の戒律も改革する必要があるというのです。さらには、もつと肯定的見解も出されました。僧侶に肉食妻帯を認めることで仏教を改革すると訴える人より、むしろ「陽守陰犯」の人のほうが「仏祖の罪人」であり、「道德の罪人」で、「社会の罪人」です。釈迦時代、開宗祖師の時代と末法である今の時代とは違うため、旧風で新しい時代には対応できません。

そこでどのような方向で仏教を改革すればよいのかという問題についても別の記事に言及されました。戒律は時勢にしたがって改革すべきという考えから、他の宗派の高僧が真宗を学ぶべきという助言がここで窺えます。その理由については、僧侶が妻帯すれば、寺院も整えられ、家も揃い、実子を持ち、血脈が受け継がれ、年をとる時も心配がないというところで、妻帯は「僧侶身体の保護」だけではなく、仏教を広めるためにもなるからです。肉食妻帯を認めることで仏教を復興していこうというような意見は明治一〇年代の終わりから次第に多くなりました。

明治二三年の初め、井上圓了が「妻帯禁制宗諸師に望む」という記事を雑誌『日本人』に投稿しました。その中で、仏教を復興させるには僧侶の遺伝性に注意すべきであると訴

えました。その次の号では、島地黙雷が早速に賛成の意を表しました。両氏は当時仏教界の肉食妻帯論に新しい論点を提唱しました。井上圓了は仏教界を、僧侶の肉食妻帯を認める真宗と「妻帯禁制宗」とに分けて議論しました。それによれば、「妻帯禁制宗」の弟子を教育・養成する方法においては欠点があります。弟子の遺伝性に注意しないことです。なぜ氏が遺伝性の重要性を訴えたかという点、遺伝性は教育に非常に密接な関係を持っていて、当時の教育者も子弟の遺伝に注意しながら教育するからだという。遺伝という側面から見て、井上氏は仏教興亡の原因を追究し、僧侶に対する要望を訴えました。仏教が盛んになる前の時代に僧侶は「上等の人物」であり、あるいは彼らの子弟であったため、優秀な人材が育ちました。しかし、今日仏門に入るのはすぐれた人材ではなく、「下等賤民の子弟」であるため、僧衆の中で優秀な人材が育つことは難しい。そのため、弟子を選ぶとき、その弟子の家系を見て、どういう家系なら合格できるかという条件を規定してほしいと井上氏は述べました。

僧侶の質の低下の原因は遺伝性の取り扱い方にある、という同じ結論を持つ井上氏と島地氏ですが、井上氏は弟子の遺伝に注目する一方、島地氏は僧侶の婚姻相手に眼を向けました。ここで島地氏は「陽守陰犯」という現象を指しましたが、女性との付き合いを隠蔽することが僧侶の妻の質に直接的に影響を与えます。なぜなら公然と選べないため、その

女性の性格、教育、身分などを見極めることができません。良い妻を選べなければ、僧侶の遺伝にも関わってきます。島地氏は弟子だけでなく、その前の段階、すなわち僧侶の婚姻、妻妾問題にまで遡って原因を分析しました。

さらに遺伝子という生物的側面だけではなく、島地氏は「感情」という観点からも議論しました。つまり、他人の子供よりも、自分の愛する子供を養育するほうが特に注意深くなるというのは人間の自然の感情であると島地氏は述べ、僧侶が良い妻を娶って、夫婦二人の良い遺伝を受けた実子を愛情をもって教育すれば仏教界に優れた人材を提供することができるという議論を、井上氏とともに仏教界に提唱しました。しかし、真宗以外、両氏が述べたとおり簡単には実現できないという意見もありました。僧侶が妻帯すると、宗規によって処罰され、内では忌憚があり、外では信徒に誹謗されるという三つの側面から批判されました。婚姻さえ正常にできないため、その妻の性格や教育のレベルを求めることができないということです。

さらに、僧侶は人間として世俗の倫理に従わなければならないという議論もありました。このような議論は「僧侶は人なり」という肯定文で始まり、仏法を広げる過程における僧侶の主体性を指摘しました。仏教は「原子」、「精気」と同じようなもので、「原子」と「精気」が結合することによって「大木」があり、またそこから新たな「原子」が生まれ

ます。「原子」と「精氣」がなければ、仏教に真理がないことと同じです。そうすれば、「大木」の僧侶は良くなく、人倫を絶つことと同じです。人間には人倫があるが、それを持たない僧侶は人々の道徳の師範にはなれません。儒教によく取り上げられる人間の五常は人類にとって必要であつて、目指すべき所であるという。ここで注目すべきは、僧侶は修行者として仏教の知識を持つことは必要ですが、人間でもあるため、世俗の人々と同じように倫理に従わなければならないということです。そうしなければ、世俗の人々を教化することができないといわれます。

このように明治二〇年代まで宗制を規定し、改正する過程において、各教団の代表は肉食・妻帯を禁止し、仏教の戒律を維持していこうという意志を示しましたが、仏教界の実情、時勢の動き、僧侶の遺伝という観点などから僧侶に妻帯を認めようという声が次第に強くなりました。その運動の結果、明治三〇年代の半ばから各教団の宗制から肉食妻帯に關する条例が撤廃されるようになりました。

肉食妻帯問題についてはそれまで真宗が最も積極的に議論していましたが、元々日蓮宗の僧である中田智学（一八六一―一九三九）も、仏教を改革するためには僧侶が夫婦の道に従わなければならないと強く訴えました。

智学は出家から一〇年を経て、一九歳の時に智境院の日進師に還俗を上申し、周りの関

係者を驚かせました。還俗の理由は本人から言えば療養ですが、実際に思想の面でどのような考えで還俗したのかを検討する必要があります。

弟子である田中香浦によれば、当時智学は「俳諧はよむべし俳諧師とはなるべからず。仏法は学ぶべし僧侶とはなるべからず。味噌の味噌臭きは上味噌にあらず」と亡くなった父から聞いた言葉をよく口にしました。智学は父を早くに亡くしましたが、在家しながら仏教を熱心に信仰するという父の姿が彼に与えた影響は小さくありません。そして、智学は還俗して一年後、すなわち明治一三（一八八〇）年に桐ヶ谷みねと結婚しましたが、実際には益々宗教活動に力を注ぎました。

明治一九（一八八六）年一二月に智学は立正閣で『仏教夫婦論』を講演し、同二二年にはまた『仏教僧侶肉妻論』を執筆しました。『仏教僧侶肉妻論』は、僧侶の夫婦の道と外部との関係を論じた『仏教夫婦論』と違って、新時代に発生してきた仏教の戒律や教義の各問題を克服する道として、僧侶の夫婦の道を取り上げました。

智学によれば、宗教の勢力は天下を動かし、万世を左右することができ、国家の治乱・興亡、人々の安危・得失にも繋がるので、宗教を慎重に扱わなければならない。もし宗教の教義を間違つて使うと世間に与える損害が少なくないといえます。つまり、智学は、世俗社会においては宗教が重大な勢力を持つと主張しました。しかし、その勢力の根源はど

ここにあるのかというと、智学は「国ノ本ハ人ナリ。人ノ本ハ心ナリ。心ノ本ハ宗教ナリ」という考えに基づいて議論を展開しました。人間の心と繋がり、心を左右することで宗教勢力は人々個人だけでなく、国家の存亡にも及びます。そこで智学はまず、「宗教ヲ以テ直チニ国家ノ基本トス」べきであると主張し、そこから自分なりの宗教改革論を提唱しました。

宗教は「心ノ本」であるということ为前提として、どのような宗教を築けば、その宗教の勢力を発揮できるのかという問題は出てくるだろうが、『仏教夫婦論』の中では、世間・国家のため教化すれば、宗教は必ずその世間・国家の最大勢力になるので、それにそつて宗教の力を示さなければならぬと智学は述べ、するどい見解を見せました。どんな宗教もどんな学説も人々のためでなければ支持されないということが実際にも見る事ができるだろう。智学のその「世間国家ノ為メ」の宗教というのとは人間の「人事ノ最大要節」であり、「道義ノ根源」である夫婦関係の正当性を示し、「完全ナル世間国家」を作り出す宗教である。それは宗教者の教化の「第一義」であるといえます。

宗教は「心ノ本」であるということで、その宗教の最大勢力を発揮するには人間の心を最も左右する夫婦道を正さなければなりません。それは彼の議論の中で注目すべき所であり、従来の肉食妻帯論に見られない論点です。これを一歩進め、別の所で智学は僧侶の夫

婦論を言及する目的について明確に述べました。その目的というのは、内では仏教の發展を図り、外では世間・国家を興隆させるというものです。ここで智学は、「国ノ本ハ人ナリ。人ノ本ハ心ナリ。心ノ本ハ宗教ナリ」という命題を裏返し、両面的に問題を検討しました。最終目的は国家を興隆させることですが、宗教と人間の心との相互的關係を前提として人間の心を動かす最も重要な道徳である夫婦の道を正すことによって宗教を發展させ、国家を興隆させるということを智学は目指しました。

そこから智学は仏教的夫婦論を展開し、人間社会において夫婦の道の重要性をより強調しました。人間の道は男女の結合による夫婦の道そのものです。夫婦の道はすべて人間の禍福の根源であり、「国家ノ最大勢力ヲ代表スルモノ」です。そのため、夫婦の道を正さなければ社会にあらゆる悪影響が出てきます。つまり、世俗の社会において、夫婦の道は人間の禍福につながり、国家の利害を左右します。夫婦の道は僧侶、そして仏教、国家とどのような關係を持つのかという問題について、智学は、僧侶の行状はすべて仏教に関わるものであり、その行状の善悪は肉食妻帯に左右されるといいます。言い換えれば、僧侶が肉食妻帯するかどうかは仏教の興亡に直接關係するということです。

そのような大切な夫婦の道に対して仏教はどのようにに対応すべきなのかという問題についても、智学の議論に見ることができません。宗教は「国家ノ最大勢力」である夫婦の道に

及ばなければ、無用の宗教です。そのため、仏教の本質を發揮しながら、男女・夫婦の道義を保護し、奨励することは、国家に力を尽くし、仏祖に報恩するための唯一の義務であるといえます。当時仏教界の一大問題である肉食妻帯に対して智学は、僧侶が夫婦の道に従わなければ仏教は無用になる、と積極的に議論しました。それだけでなく、智学は「仏教夫婦論ハ、廻子斯ノ要義ヲ注シテ、以テ聊カ仏教救世ノ直路ヲ拓ク」と述べ、僧侶が妻帯することによつて、直接的に衆生を救済することができるという肯定的な議論まで展開しました。

夫婦の道は世俗社会においても仏教界においても重要であると智学は主張しましたが、その他、僧侶に肉食妻帯を容認すべきも一つの理由は、『仏教僧侶肉食論』の中で論じられた「末法無戒」思想です。智学によれば、仏教において固定する「眞実」と変えられない「方便」があります。「眞実」というのは教義で、「方便」というのは戒律ですが、末法時代に入ると、「眞実」を顛し「方便」を変更するのは、「釈迦仏ノ嚴誠」に基づいたものであるといえます。

さらに、肉食妻帯を禁止する戒律は「空律」である、と智学は強調しました。つまり、僧侶に肉食妻帯を禁止することは、人間本来の姿を犯すことです。人間は禁止されると、戒律を破るようになります。人間は戒律を維持することができず、戒律は人間のことを考

慮しません。そのため、戒律は日々仏法を破滅させ、人間の道徳を腐敗させる「空律」であるといえます。そのような観点から智学は、太政官布告第一三三号を見直して、明治政府は時代の動きによって僧侶に蓄髪・肉食・妻帯を解禁することは「一大改革ヲ断行スル」ことであり、仏滅以降「絶大ノ英断」であると評価しました。

夫婦の道の重要性を取り上げ、戒律の人間性の欠如を訴え、新時代に僧侶が妻帯しなければ仏教が無用になると主張して、僧侶の肉食妻帯問題を積極的に議論したのは、従来に見られない智学の独創的議論であるといってもよいでしょう。

智学は、自然の原理からみれば、夫婦の道について男女の關係を持つのは「固有ノ權利」でもあり、「法然ノ義務」でもあるといえます。そして人類進化において男女の關係は自然淘汰である。社会の基本は男女の關係にあり、万物のすぐれた機根は夫婦の結合力にあると智学は明確に述べました。つまり、夫婦の道は社会だけでなく、自然の世界の基本ともなっています。さらに、人間の倫理においても男女の關係は「大本」として挙げられました。智学によれば、男女の關係がなければ人間の倫理もありません。男女の關係は愛情によつて発するものであり、欲望によつて成るものであり、道徳に繋がるものであるため、それを失えば、父子や兄弟などの倫常も破滅し、衆生を救済する道も失われてしまうといえます。つまり、社会の倫理を維持し、仏法を發展させるには、まず人々の愛欲を満

たさなければなりません。智学の思想について、池田英俊氏は、「個人のもつ心の世界に、いくら往生や安心を求めようとしても、心を入れる身体や、心を支える環境などの諸条件が不安定であるならば、宗教による理想を実現することが難しいと見なす…」と述べました。夫婦の道は、智学の議論において、まさに氏が「心を支える」条件です。その条件を満たすことで僧侶の力を發揮させ、仏教を復興し、国家を發展させます。

このように智学は、仏教の復興をはじめ、社会の倫理、国家の發展、自然の法などのため、僧侶は肉食妻帯しなければならないという、それまでにない肯定的議論を提唱しました。そこで、智学が目指した仏教はどのような仏教なのかということについて検討する必要があります。

…吾ガ日本帝国ヲ離レザルノ立教ハ之ヲ日本的仏教トイハズシテ何ゾヤ、コノ積極趣味ナル日本的仏教ハ、終ニ日本ヲ動ゼズシテ即チ亦コレ一閻浮提ノ仏教タルベシ。

(中略) 人生ノ現益ヲ以テ仏化ノ至極トスルノ教旨ニハ、男女道義ノ保護ヲ絶チ、夫婦礼教ノ大事ヲ等閑ニスルノ謂ハレ、断々トシテコレ無キコトヲ又応サニ知ルベ

シ。(田中智学『仏教夫婦論』)

智学にとつて、理想の仏教というのは日本の社会に強く根付いたものであり、「閻浮提ノ仏教」、すなわち現世仏教、世俗社会のための仏教です。その仏教を支えるのは他でもない、男女の道義であつて、夫婦の道です。夫婦の道を正せば、社会全体が見事に繁栄するということが智学の夢ではないかと思われます。ここで注目すべきは、「日本的仏教」という言葉です。その仏教というのは本来の仏教の古風に関わらず、日本社会のため、日本人のための仏教です。これまで報告者は、古代から近代までの日本仏教における肉食妻帯問題を考察してきましたが、僧侶が公然と肉食妻帯し始めたのは明治時代からではなく、日本仏教史においての超歴史的問題であつて、他の地域の仏教と違ってまさに智学が指摘するような「日本的仏教」です。『仏教夫婦論』と『仏教僧侶肉食妻帯論』という二つの著書によつて、智学は日本仏教の肉食妻帯論を完成させたといつても過言ではありません。

2 近現代ベトナムの民族主義と入世仏道

日本と違つて、ベトナム仏教の世俗化は、仏教界自身の改革に関わるよりも国家の存亡、特に民族解放運動と密接に結びつきます。

フランス植民地時代（一八五八〜一九五四）の当初、仏教と儒教の知識人が抗仏勤王運動の中核でした。仏教界では、南部のカイン・ホア（Kham Hoa）、ティック・ティエ

ン・チェウ (Thích Thiện Chiếu)、中部のティック・フオック・フエ (Thích Phước Huệ)、
ヴォー・ツー (Vô Trụ)、北部のタイン・ハイン (Thanh Hinh) が、民族解放運動に力を
尽くした代表的僧侶として挙げられます。ヴォー・ツー蜂起はその中の一つですが、ヴォ
ー・ツーは僧侶であり、詩人であり、民族解放運動家でした。彼はフー・イエン省にある
寺院を基地にし、蜂起を起しましたが、一八九八年に惨敗し、自らフランス軍に出頭し、
斬首されました。南部ではティック・テイエン・チェウ (一八九八〜一九七四) という僧
侶も愛国心を持ち、民族独立を憂慮し、民族解放運動に参加しました。しかも、僧侶とし
て仏教を復興することが国の力になると考え、国語を教える学校をつくり、仏教經典を漢
字から国語に翻訳し、書物を執筆し、出版社を起こし、『新青年仏化』などを刊行する事
業を起こしました。一九三六年に出版された『なぜ仏教に感謝したのか』という著書にお
いては、僧侶は「内典」(仏教の經典)と「外典」(仏教以外の書物)を探求し、考え方
を変え、時代の動きに柔軟に対応し、寺院の外で活躍すべきであって、民衆を苦惱から救
済するためなら何でも犠牲にすることが釈迦の趣意であると熱く語りました。さらに、管
轄するお寺の三門に「仏法は入世而非厭世、慈悲乃殺生以度衆生」と書いて、自分の仏教
の方針を世間に宣伝しました。ここで注目すべきは、ティック・ニャット・ハンの前に、
ティック・テイエン・チェウが「入世」を使っていたことです。

ベトナム戦争（抗米救国戦争ともいう）になって、ベトナム北部は社会主義を築こうとしますが、南部では一九五四年にゴ・ディン・ジエムが大統領に就任しました。彼は国家キリスト教をつくろうとしたため、仏教、特に民族解放運動に関わる僧侶を弾圧しました。南北分離の中で仏教界は難しい立場に置かれていましたが、一九五六年に第二回全国仏教会議を開催し、雑誌『ベトナム仏教』を刊行し、国の統一と平和運動を掲げました。

それと同時にゴ・ディン・ジエム政権の仏教政策に対して反対運動も起こしたため、南ベトナム政権と仏教界との対立が高まりました。一九六三年五月六日にフエの寺院などで仏生会の前に旗を揚げましたが、ゴ・ディン・ジエム政権がそれを禁止しました。しかも軍隊が同年五月八日にフエのラジオ局に集まった仏教信者を射殺したため、僧侶と仏教信者がデモを行いました。サイゴンでも五月三〇日に僧侶が絶食し、ゴ・ディン・ジエム政権に反対しましたが、ひどく弾圧されました。仏教界と南ベトナム政権との対立はその後も続いていましたが、その頂点は同年一〇月六日に起きたティック・クワン・ドウツク（Thích Quang Đức、釈廣徳）の焼身事件です。この事件はベトナムだけでなく、当時世界中で大きな反響を呼びました。

次に、「ティック・ニャット・ハンの『入世』思想の展開とその実践」についてお話ししたいと思います。ティック・ニャット・ハン（釈一行、一九二六〜）はベトナム中部の

フエ出身ですが博學で、禪師、仏教學者、作家、詩人、平和活動家として幅広く活動しています。一六歳で出家、得度してから、サイゴンで社会福祉学校や仏教大学などを起こし、積極的に社会活動をしました。僧の身でありながらサイゴン文科大学で勉強し、しかも卒業した後、アメリカへ留学しました。一九六四年に帰国しましたが、平和を訴え、反戦運動を指導したため、南ベトナム政權と対立し、外国で亡命生活を始めました。その時期、ティエップ・ヒエン（接現という漢字で書かれ、仏教を悟った人に接し、その人の力を吸収し、その力で世俗社会に仏教の慈悲を実現させる）宗派を開き、フランスの西南地方に道場としてランマイ（Lang Mai、梅の村）を建設しました。今も熱く信仰され、常に四〇〇人から五〇〇人ほどの弟子が修行しているようです。

亡命してから三九年後、戦争が終結してから三〇年後、ティック・ニャット・ハン師は二〇〇五年一月に初めてベトナムを正式的に訪問し、ベトナム政府との関係を改善することができました。二〇〇七年には再び、世界各国の仏教者が集まるウエーサーカ祭に参加するため帰国しました。

ティック・ニャット・ハン師の人生の大半は戦争でした。師は修行者として中立的立場をとったため、当時のベトナム社会の現状を客観的に見ることができ一人です。しかし、見ればみるほど、師は誰よりも戦争の残酷さを感じたようです。『火の海の中の蓮華』と

いう著書で、師は次のように述べています。「二〇年間も戦争が続いたあと、ベトナムの社会はいまや分裂の極に達しようとしている。日々起きている無用の殺戮と死、財産の破壊、人間の価値を低下させる腐敗した金の使い振りは、ベトナム人の間に広く不信と挫折感を植えつける結果をもたらした」。その戦争の被害者は罪のない民衆でしかないのに、彼らを救済する存在が欠如していると師は気付き、彼らの苦悩に対する僧侶の責任を感じました。「ベトナムの宗教指導者の責任は、一般市民の苦しみに対する宗教人としての当然の関心事について発信し、さらにそれを遂行し、戦争を終わらせるための明解で現実的な方法を見いだすことである」と、師は述べました。戦乱の中、僧侶はお寺に籠って修行する時ではなく、外に出て活動し、戦争を終わらせることによって人々を救おうとしました。その考えから、「入世」仏教の必要性を強く訴えました。

「入世」思想についてですが、ティック・ニャット・ハン師によれば、一九五四年『民主』(Dân chủ)新聞に十回にわたって連載された「新しい認識から見た仏教」に初めて「nhập thế」(入世)という言葉を導入し、実践的仏教を展開させようとなりました。その後、師の著書やスピーチなどでも多く触れられていますので、それに基づいて師の「入世」思想を分析したいと思います。

ティック・ニャット・ハン師は戦争の残酷さによって目覚めたわけですが、修行者とし

てどのような姿勢で世俗社会に出ようとしたかという点、「仏教を世俗社会に持つていく人は悟った人であり、欲望を持たず、執着心を持たない人でなければならぬ」と述べました。つまり単に社会に出るのではなく、きちんと仏教精神を理解し、修行者として成長してから世俗社会に出ることです。その点では、入世する僧侶と社会活動家は違うのです。「僧侶が様々な社会組織に現れることは必要であり、誰も否定しないが、常に悟った人としての道徳・精神を持参しなければならない」と師は主張し、仏教の精神、慈悲を持つて、人々を「仏化」するという思想を展開させました。僧侶が入世するということは、単なる社会活動をするのではなく、社会活動もその宗教活動の一つであると認識することではないかと思えます。

そのような姿勢で世俗世界に入ろうとしますが、いったいどのような仏教を目指すかという点、ティック・ニヤット・ハン師によれば、入世仏教というのは「生きた仏教」であり、「生きた仏教は、その時代の社会環境の一部となりうるよう、その条件に応じて変化する、適応しなければならぬ。仏教の形態を変えようとするのは、とりもなおさず仏教本来の姿を保持せんがためである」と考えました。師は入世仏教、「生きた仏教」という思想で、仏教を社会の新しい状況に適応させ、社会とより深く関わらせようと思いました。その師の思想に決定的影響を与えたのは、一九六三年に起きたティック・クワン・ドゥック

師の焼身事件であると推察することができません。この焼身事件については今まで、世界中のメディア関係者や研究者などによって数多く言及されてきました。この件に関して報告者の個人的意見を述べさせていただきますと、ティック・ニヤット・ハン師は誰よりも衝撃を受けましたが、ティック・クワン・ドウツク師が焼身という行動を通じて訴えようとしたことを誰よりも深く理解していたと思います。ティック・ニヤット・ハン師が焼身事件についてどのように解釈したかを検討したいと思います。

まず師は、「焼身自殺」という言葉遣いに対して反感を持ち、ティック・クワン・ドウツクの焼身という行為は「自殺」ではないと否定しました。「本質的には自殺ではありません。また抗議ともいえません。僧たちが焼身の前に残した手紙でいわんとしたのは、抑圧者の目を開かせ、その心をゆさぶり、そしてベトナム人の苦難に対して世界の注目を集めようとしたことでした」、「焼身による意思表示は、破滅行為ではなく、建設的行為の随行、つまり人々のために苦しみ死ぬことです。それは自殺ではありません」と述べ、ティック・クワン・ドウツク師の焼身は「人間の心の誠意のすべてを表現」する行為であると敬服の念をこめて高く評価しました。ティック・ニヤット・ハン師によれば、その焼身が向けた対象というのは、「彼ら（焼身した僧たち―報告者注）の敵は人間そのものではなく、人間の心にある狭量、狂信、独裁、強欲、憎悪、差別こそが敵なのです」。その焼

身という行為は「自己を犠牲にして最高の慈悲の教理を實踐」、「人を殺すな」という絶望的な嘆願」です。それは簡単に實現できる行為ではなく、「最大限の勇氣と決意と誠意をもって」「この世では最大の苦痛」を耐えなければできないことです。つまり仏教戒律を犯すとされる焼身行為によって、「人を殺すな」（＝殺生するな）という仏教の慈悲の教理を實踐することです。一見、矛盾のように思えますが、それはまさに修行者の良心と普通の人間の良心との戦いです。修行者として絶対にしてはいけないことであると誰よりも分かりながらその壁を破って乗り越えようとするには、やはりティック・ニヤット・ハン師が言ったとおり、「最大限の勇氣と決意と誠意」が必要です。ティック・ニヤット・ハン師から見れば、その行為、つまり「入世」はティック・クワン・ドゥック師の焼身行為と同じことです。自分の身体が焼ける痛さにどれだけ耐えなければならぬか、誰よりもティック・クワン・ドゥック師は分かっている。分かっているが「最大限の勇氣と決意と誠意をもって」焼身したというのは、自分の人生よりもっと大きな目標がありということなのです。それは残酷な戦争を一日も早く終わらせ、人々を戦争の苦しみ、悲しみから救うことです。ティック・クワン・ドゥック師のような僧侶は、ティック・ニヤット・ハン師の言葉を借りて言えば「火の海の中の蓮華」です。苦痛を忍んで世に花を咲かせることでしよう。

このようにティック・ニヤット・ハン師の思想の中では、「入世」は「火の海の中」に入ることと同じですが、それは僧侶が一人で苦しむことではありません。「仏教の現実化への道には、内外からの大きな苦痛が伴っている。ベトナムの変革は仏教の変革でもある」と、ティック・ニヤット・ハン師は述べました。つまり、「あらゆる生き物の救済」のため、自己だけでなく、仏教そのものを犠牲にすることによって、仏教の慈悲を実現するのです。それは僧侶の社会活動の深い根源であって、一般社会活動家と根本的に違うところではあります。

入世仏教の最終目的は人々を苦しみから救済することですが、暴力ではなく、「愛と親交」、つまり仏教の慈悲で人々、特に「世界の人道主義者」の心を動かすことです。一九六五年に、ティック・ニヤット・ハン師はマーチン・ルーサー・キング牧師あてに、いわゆる「焼身自殺の意義」という手紙を送り、共感を求めたのもそのためです。

ティック・ニヤット・ハン師の実際の宗教活動を見てみると、まさにこの「入世」思想を実践しようとしたということが分かります。そしてその苦労も少なくありません。師は反戦運動を指導し、中立的立場をとりましたが、当時苦しい状況におかれました。それでも自分の自由、生命までも危険にさらして行動しました。「この旅（アメリカへの旅―報告者注）から帰国すれば、私の身の上には間違いない危険がふりかかってきます。しかし

私はこの危険を喜んで受け入れます。何となれば、私は、もしアメリカの民衆がベトナムで起きていることについてベトナム人がいだいている感情のいくらかでも理解しはじめれば、われわれ南北ベトナム人が耐えている不必要な悲劇、苦難の大部分は取り除かれるであろうと確信しているからです」。そして、熱い愛国心を持っているティック・ニヤット・ハン師は、実際に長い間、亡命生活を送らざるをえなくなります。それがティック・ニヤット・ハン師の入世思想の奥深い意味です。

おわりに

以上、二つの世俗化のパターンについてお話しましたが、それを実現させるのは簡単ではありません。現在、日本仏教の僧侶は簡単に結婚するかもしれませんが、親鸞聖人の「非僧非俗」思想は重みがあつて、「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して」いたことによつて生まれたものです。明治政府は、明治五年から僧侶に「勝手に」肉食妻帯できると許可しましたが、真宗以外、他の宗派の僧侶が実際に肉食妻帯するのは、文献から見れば少なくとも明治三〇年代からです。つまり三〇年ほどかかりました。ティック・ニヤット・ハン師の言葉でいえば、「ベトナムの変革は仏教の変革でもある」。つまり、世俗化は社会の変化に対する仏教界の対応であり、国によつて対応方法が違います。現代ベ

トナム仏教は、寺院維持、住職留守、人材不足問題にも直面していますが、日本仏教のように世俗化しないのではないかと思います。

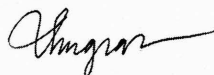
社会が変動することによって人間の精神の苦悩が発生してくるわけですが、そこで仏教救済が必要になり、僧侶が世俗社会にまで活動範囲を拡大しなければならないことになるのです。

「出家入俗」と「出家入世」という二つの世俗化のパターンは、仏教と世俗社会との結びつきを深めるために展開されましたが、現代仏教にとって発展の可能性があるのか、限界であるのか、発展を可能にするためには仏教界の中でどういう動きを取るのかを今後の課題として考察してゆきたいと思います。

発表を終えて

日文研フォーラムで発表させていただいたのは、日文研に来てから5ヶ月目です。まだ研究成果と言えるほどの報告ではありませんが、この5ヶ月間で日文研の先生方から勉強させていただいたことをまとめた報告だったといっても過言ではないでしょう。今まで、日本仏教の肉食妻帯問題の実態と、そこに潜んでいる思想を研究してきました。僧侶が公然と肉食妻帯できるという点で、日本仏教は他の国の仏教と違うという認識からそのような研究テーマを設定しましたが、実際どこまで違うのか、具体的にどこがどう違うのかを漠然と考えただけでした。今回の日文研フォーラムに向けて日本社会の中において、日本の仏教を研究するのではなく、一步外に出て日本仏教の肉食妻帯問題とは一体どういう問題なのかを見直そうと試みました。それはすなわち国際的視野で日本文化の理解を深めるということですが、いうまでもなく、受け入れてくださった末木文美士教授をはじめ、日文研の先生方の研究活動から実感し、勉強になったことです。フォーラムの前にはもちろん緊張し、そのような話を一般市民の方々に話しても良いのか悩んだりしました。しかし、フォーラムが終わってみると、その目標があるからそれまでずっと考えたことが急速に固まって、はっきりした「世俗化」概念と「入俗」、「入世」という対比的でありながら、最終的に共通点を持つ二つの概念を自分なりに検出することができたと思います。学術的にどのように展開するかはこれからの課題にさせていただきたいのですが、その最初を踏み出す一歩を110人という大勢の方々が暖かく引き受け、報告者である私と一緒に真剣に考えてくださったことは非常にありがたいことだと思います。今振り返ってみると、大変貴重な機会を与えられたとしみじみ感じております。

当日きちんとお礼を申し上げることができませんでしたが、この場を借りて、ご多用でありながらご丁寧な指導と、司会そしてコメントをしてくださった末木文美士教授、それまで私の研究に協力して下さった方々、日文研の研究協力課の皆様、ご参加の皆様に深謝の気持ちを申し上げたいと思います。今後とも研究に励み、努力いたしますので、何卒宜しくお願いいたします。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヅヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ジャン・シニコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>キンヤ・ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヅヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>SHIMAZAKI Hiroshi 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩9	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—一宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 暁捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユフスカラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケ ネ ス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑫	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑭	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑮	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑯	13. 4.10	L I Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑰	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑤	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラ スティーン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミアノー ト マシ Massimiliano TOMASI (ウエスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	ALEXIA BORO Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	MARKUS RÜTTERMANN Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑬	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	SUSAN L. BURNS Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	DAVID L. HOWELL David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	ZHAN Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	RICHARD H. OKADA Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル スウ エル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	PARK JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァaporis Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩⑦	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩⑦	16. 7.13	Victor Victorovich RYBIN ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	Scott NORTH スコット ノース (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	Alexander Marshall VESEY アレクサンダー マーシャル ヴィーシー (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	Roy Anthony STARRS ロイ アンソニー スターズ (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャーラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑩⑦	17. 2. 8	Mats Arne KARLSSON マッツ アーネ カールソン (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑩⑦	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究センター専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人民大学が見た日本のテレビドラマをめぐる—」
⑩⑦	17. 4.12	Noel John PINNINGTON ノエル ジョン ピニンガトン (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	IAN ジェームズ マック マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
①82	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光齋—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレックナー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サレー アデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ-なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか-」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象-18世紀朝鮮通信使の目から-」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について-中日農村を比較して-」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTE (リトアニア ビリニュス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」-高等教育の社会科カリキュラムを中心に-」
①96	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「お札 <small>ふだ</small> が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語-江戸後期に描かれた船-」
①98	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科准教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究-宮沢賢治の素食主義の思想-」
199	19. 2.13	スティリアノス パパレクサンドロポロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 准教授 日文研 外国人研究員) 「日本仏教論-その思想史的展開をめぐって-」

200	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
201	19. 4.18	モ ハ メ ヲ ヲ ヲ レ ザ サ ル カ ー ル ア ラ ニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラム タバクバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG ZheJun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
203	19. 6.13	チャワリン サウエッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「『気』の思想・『ころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」
204	19. 7.25	シンシア ネリ ザ ヤ ス Cynthia Neri ZAYAS (フィリピン国立大学国際研究センター準教授・日文研外国人研究員) 「淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—」
205	19. 9.11	チャン ティ チュン トアン TRAN Thi Chung Toan (ベトナム国立ハノイ国家大学助教授・日文研外国人研究員) 「宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解」
206	19.10.10	ペイ ヒョンイル PAI Hyung Il (カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授・日文研外国人研究員) 「朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン」
207	19.11.14	KIM YoungCheol 金 榮哲 (漢陽大学校日本語文化学部教授・日文研外国人研究員) 「遊興の『花』としての理想—妓生と遊女—」
208	19.12.12	WANG Weikun 王 維坤 (西北大学国際文化交流学院教授・副院長・日文研外国人研究員) 「中国出土の文物からみた中古古代文化交流史—和同開珎と井真成墓誌を中心として—」
209	20. 1.16 (2008)	ブライアン 小野坂 ルバート Brian Onozaka RUPPERT (イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授・日文研外国人研究員) 「懺悔・供養・修法 —前近代日本仏教の心を探る—」

210	20. 2.26 (2008)	マイク モラスキー Michael S. MOLASKY (ミネソタ大学准教授・日文研外国人研究員) 「関西のジャズ喫茶文化」
211	20. 3.18	グニラ リンドバーク ワダ Gunilla LINDBERG-WADA (ストックホルム大学主任教授・日文研外国人研究員) 「北極から日本へ —スウェーデン探検隊が見た明治日本—」
②12	20. 4.23	ZHOU Jian 周 見 (中国社会科学院世界経済政治研究所教授・日文研外国人研究員) 「洪沢栄一と張謇 —日中近代企業家に関する一つの比較—」
213	20. 5.14	KIM Jeong Hae 金 貞恵 (釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン」
214	20. 6.11	フレデリック ジラルール Frédéric GIRARD (フランス国立極東学院教授・日文研外国人研究員) 「ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ—エミールギメと日本の僧侶神主との問答—」
②15	20. 7. 9	アレクサンダー ヴォヴィン Alexander VOVIN (ハワイ大学マノア校東洋言語文学部教授・日文研外国人研究員) 「萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布」
②16	20. 9.11	KIM Pil Dong 金 弼東 (世明大学校日本語学科副教授・日文研外国人研究員) 韓国における日本研究が語るもの
217	20.10. 9	WANG Zhongchen 王 中忱 (清華大学人文社会科学学院教授・日文研外国人研究員) 1930年代の『改造』における魯迅の日本越境
②18	20.11.12	ジェームズ バスキンド James BASKIND (日文研海外研究交流室プロジェクト研究員) 日本における禅浄双修—黄檗宗を中心として
219	20.12.10	ノリコ マナベ Noriko MANABE (ニューヨーク市立大学非常勤講師・日文研外来研究員) 洋楽ジャンルの適応と変遷：童謡、ヒップホップとレゲエの事例研究

220	21. 1.16 (2009)	GUO Nanyan 郭 南燕 (日文研准教授) 志賀直哉の関西観
221	21. 2.17	HU BaoHua 胡 宝華 (南開大学歴史学院准教授・日文研外国人研究員) 内藤湖南の中国学界に与えた影響
222	21. 3. 9	ヴォルフガング シ ャ モ ニ Wolfgang SCHAMONI (ハイデルベルグ大学教授・日文研外国人研究員) 江戸時代における無名の人々の伝記
223	21. 4.14	KAWANA S a r i 河名 サリ (マサチューセッツ大学ボストン校助教授・日文研外国人研究員) メディア・ミックスの系譜 —近代文学とベストセラーと視覚文化—
224	21. 5.12	CHO Chung Nam 趙 政男 (高麗大学校政治外交学科教授・日文研外国人研究員) 変わりゆく国家と民族のすがた
225	21. 7.14	ジョン ブリー ン John BREEN (日文研准教授) 天皇のギフト —明治外交の一齣—
226	21. 9. 8	NOHARA Hiroatsu 野原 博淳 (フランス国立科学研究センター上級研究員・日文研外国人研究員) 日本の技術者とフランスの技術者—技術革新の担い手—
227	21.10.26	CHOO Kukhee 秋 菊姫 (東京大学交流研究員) 韓国の純情漫画と日本の少女マンガ
228	21.11.16	ファム ティ トウ ザ ン PHAM Thi Thu Giang (ハノイ国家大学・人文社会科学大学東洋学部日本学科専任講師・日文研外国人研究員) 世俗化から見た近代仏教—日本とベトナムとの比較—
229	21.12. 8	Nam-lia Hur 許 南麟 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研外国人研究員) 近世日本における開帳と秘仏の文化

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2010年2月22日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

©2010 国際日本文化研究センター

■ 日時

2009年11月16日（月）

午後2時～4時

■ 会場

ハートピア京都

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化

日本文化の歴史と現代の文化